

格差社会の階層イメージ

～SSM1985 と SSP-I2010 との比較を通して～

学習院大学 数土 直紀

1 目的

高度経済成長を終えた 1970 年代後半から現在にかけて、人びとの日本社会に対するイメージは大きく変化した。その変化を一言で要約するならば、それは“総中流社会”から“格差社会”への変化だったといえるだろう。しかし、人びとの社会イメージが“総中流社会”から“格差社会”に変化したといっても、その変化はそれと分かる形で人びとの階層帰属意識上には現れているわけではない。実際に、内閣府が実施する『国民生活に関する世論調査』をみても、あるいはその他の主だった社会調査の結果をみても、階層帰属意識の分布に顕著な変化を観察することができないからである。本報告では、これまでの先行研究とは異なり、“総中流社会”から“格差社会”の変化を階層帰属意識ではなく、階層イメージに見出そうとする。そして、単に階層イメージの変化に注目するだけでなく、そのような変化が吉川徹の明らかにした階層帰属意識の“静かな変容”とも関連していたことを明らかにしようとする。

2 方法

本報告で分析にもちいられるデータは、一つは 1985 年に実施された「社会階層と社会構造に関する全国調査」（1985 年 SSM）であり、もう一つは 2010 年に実施された「2010 年 格差と社会意識についての全国調査（面接）」（SSP-I2010）である。この二つの社会調査データは、調査対象者に対して共通の質問形式で階層イメージについて尋ねており、相互に比較可能な回答を得ている。したがって、それぞれのデータから得られる回答を比較分析することによって、1985 年から 2010 年にかけて人びとの階層イメージにどのような変化があったのかを明らかにすることができる。

3 結果

分析の結果、1985 年から 2010 年にかけて、“上の割合が減少し、下の割合が増大する”という階層イメージの下方シフトが生じていることが明らかにされた。この結果は、統計的にみても有意であった。またそれと同時に、人びとの階層イメージのばらつきも小さくなっており、1985 年と比較して、人びとの階層イメージは相対的に似通ったものになっていることも明らかにされた。この結果も、統計的にみて有意なものであった。そしてこれらの結果から、“総中流社会”から“格差社会”の変化は、自身の主観的な階層的地位の変化であったのではなく、人びとが社会に対して持っているイメージの変化であったことがわかる。またこのようなイメージの変化は、人によってばらばらであった社会イメージが共通化される過程とともに、いいかえれば人びとが自身の主観的な階層的地位を測る比較準拠集団の共通化とともに生じていたのである。

4 結論

先行研究によって示されてきたように、“総中流社会”から“格差社会”の変化にもかかわらず、階層帰属意識の回答分布には大きな変化が生じていない。しかし、階層イメージについては回答分布が下方へ大きくシフトしており、しかも個人間のばらつきも小さくなっている。このことは、総中流社会から格差社会への変化が（マスメディアによる情報提供や知識人による言説の流布を介して）人びとの社会イメージが共通化されていったことで生じた可能性を示唆している。

【謝辞】 1985 年 SSM データは 2005 年 SSM 研究会の許可を、SSP-I2010 データは統計数理研究所共同研究プログラム（25-共研-1015）に基づき SSP プロジェクトの許可を得て使用しています。また本研究は科学研究費補助金（No.24530599）による成果の一部です。

【追記】 分析結果の詳細及び文献等の情報は、報告当日、会場にて示します。